
失恋を始めよう。

時雨刻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋を始めよう。

【Nコード】

N4065A

【作者名】

時雨刻

【あらすじ】

天然娘・静紅の好きな人は、同じバイト先の人。でもその人には彼女がいて……

1 *彼とその彼女さん

決して告げられないこの想い
風と共に 遠く遠く 流れてしまえ

彼とその彼女さん

好きだと気付きたくなかった。自覚してしまったら、そこでオシマイ。今までと同じように接することは、できないから。とっても優しい、一つ年上の男の人。同じバイト先。
いらっしやいませーと声の飛び交う中、静紅は溜め息をついて、ついて、つきまぐった。

「ねえ真理たん、人生って難しいねえ？」

同じ学校でもある真理にそう告げると、彼女は眉を寄せてはあ？と怪訝そうな声を出した。次に、いや静紅ちゃんが天然なのはわかってるんだけどと呟く。

この

「天然」

という言葉を、静紅は生まれてから十八年間絶えず聞かされてきた。両親も弟も友達になった人も知り合った人皆が

「静紅ちゃんて天然だよね」

と言うので、静紅は国語辞典で調べた事がある。

意味：1：自然のままの状態。 2：生まれつき。 天性。

……つまり天然ボケは生まれつきボケという意味なのか、と妙に落胆したことを思い出していると、真理が静紅の目の前でひらひらと手を振った。

「な、何っ？」

「ソレはこっちの台詞。何かあったの？」

「んー……天然って生まれつきって意味なんだよ……って事を考えてたの」

「さっきの人生がどうとかって話はどこに行ったのよ……」

大きく溜め息をつかれて静紅がきよとんとしたとき、入口が開いたらしく音楽が鳴った。

静紅は慌てて入口の前に立ち、入ってきた人物に声を投げる。

「いらっしやいませっ！何名様ですかっ？」

「じゃあ300人で」

「さっ……！？店に入り切らないです……っ！というか食材もそんなにあるかどうか……っ」

あまりの客の人数に驚いて顔をあげると、にこやかに笑みを浮かべて立っていたのは同じ職場の人だった。

静紅がしている接客ではなく調理場で働く市村和貴さん。

「今日も面白いなー、平山さんは。おはようございます」

「あ、あははー……オハヨウゴザイマス……とりあえず本当に300人じゃなくてよかったです……」

普通ないだろと笑いながら、おはようございますと奥の人達にも挨拶する和貴の後ろ姿を見送っている静紅のそばに、真理が小走りで

近付いてくる。静紅の顔がにやけているのに気がついて、真理は綺麗な顔を歪めた。

「……なに、気持ち悪いよ……？またからかわれたのね、あんたはいじられキャラだもんねー」

「ちっ、違うもん！どっちかっていうと、いじめられキャラだもんっ」

「何それ自虐？」

これだから天然は、と真理が笑うのを膨れっ面で見上げ、調理場の中を覗きこんだ。

ホールと調理場はカウンターで区切られていて、ホールは女の人が、調理場は男の人が勤務している。ほとんどバイトの人だけれど、皆賑やかでいい人達だ。

カウンターに両手をついて、調理場を眺める。和貴の姿が見当たらず、静紅は溜め息をついた。

「……静紅ちゃん、暇なの？溜め息ばかり」

「う、うん……今日は平日だからお客さん少ないし……」

「暇なら、はい。お仕事」

語尾に思いつきりハートマークをつけながら、真理は静紅に大量の割引券を渡した。

……本券一枚につき一名様まで、300円引き。

「……なあに、これ」

「そこにね、この判子押すの。はい、割引券の完成。じゃあよろしくね、私入口見てるから」

店の名前の判子を押して初めて、この券は割引券となるのだろう。

そしてその判子を静紅に渡すと真理は店の入口へと行ってしまった。
静紅は大量の

「割引券もどき」
をカウンターのの上に置き、半分涙する。

「うつつ……同じ暇なんだから手伝ってくれたってー……」

「ははは、平山さんまた遊ばれてんの？」

名前を呼ばれて静紅は顔をあげた。調理場には和貴が立っていて、
こちらを見ている。

静紅は慌てて割引券をかき集めると、隠すように抱き締めた。

「違いますっ非常食ですっ」

「……えっ、割引券が？食べるの？」

「うつつ……た、食べますっ……頑張っ……」

静紅の言葉に和貴は爆笑する。平山さんおもしろー、と言いながら、
調理場の人達の所へ向かった。

向こうから笑い声が聞こえてきたのを見ると、おそらく今の会話を
話しているのだろう。

静紅は判子を朱肉につけて割引券へ押し、を繰り返しながらうつつと
うめいた。

「どーせどんどん静紅は変なキャラになっていくんですよーだ……」

朱肉をつけるとんどんという音と、割引券に押しどんという音が一
定の間隔で響く中、客が入ってきた事を告げる音楽が鳴る。真理が
入口にいるので大丈夫だろうと思った静紅は再び判子を押し作業に
没頭し始めた。

とんどん、どん。

とんとん、どん。

「……凄いな、静紅ちゃん。機械みたい……」

静紅の後ろからひよっこりと顔を出したのは、春野椿。和貴の彼女だ。

「あ、おはよーございます椿さん」

「おはよ

にこっ、と笑う椿はとても人がよく見える。実際とてもいい人なのだけれど。

「何してるの？」

「あ…う、雑用ですかね…っ」

思い出して再びとんとん、どんを繰り返し始めた静紅を見て、椿はくすりと笑った。

「じゃあ、すぐに着替えて静紅ちゃんを手伝っちゃおうっ」と

「あ…っ、ありがとうございますっっっ」

るんるんと鼻歌を歌いながら調理場を通って休憩室に向かう彼女。和貴と椿の声が、静紅の耳に届いた。楽しげな声。自分はその中に混ざることにはできないのだと、少し疎外感を感じる。またもや溜め息をついている静紅に、真理が不思議そうに声をかけた。

「どしたー？溜め息ばかりついて。何か悩みごと？」

「うーん、悩んでいうかこれは病気だと思うー……」

恋の。と心の中で付け足していると、真理は本気で心配そうに静紅を覗きこんだ。

「はい！？病気！？大丈夫なのっ！？」

「うんー心のだから大丈夫ー」

しょんぼりしながら言った静紅に、真理はああと呟きを落としたり。そして、ぽんぽんと静紅の背中を叩く。

「静紅ちゃんが変わるのは皆知ってるから、落ち込まなくても大丈夫よ。天然ってきつと一種の心の病なのよね」

「違います！真理たんてば天然を静紅の代名詞だと思ってるでしょっ！？」

「あれ？違うの？」

「違うもんっ！静紅はポケじゃなくてむしろツッコミだもん！」

切れ味抜群の！と叫んだ所で和貴がええと非難なのか不満なのか、奇妙な呟きを投げてよこした。

「平山さんは真正銘のポケだよ」

「酷いや市村さん！」

わぁんと叫びながら静紅はその場を離れる。今は、彼と話す余裕がない。

気持ちは伝えられない。好きだという感情は止められない。椿と和貴が話している所を見ると、色んな感情が溢れて来て自分が自分でなくなる気がする。自分が壊されて、崩されていく感覚。

「あーあ……何してるんだろ、静紅」

一人咳いてみたけれど、胸の苦しさはおさまらなかった。

2*ジレンマ

どうしようもなく切なくて 空を見上げたら
溢れる涙を隠すように 一緒に泣いてくれた

ジレンマ

お疲れ様です、と疲れ切った声で言いながら休憩室の扉に手を掛け、中に入る。

がちやりと何の変哲もない音をたてて、扉は簡単に開く。
狭い部屋でテレビを見ていたのは、和貴。静紅は驚いてしばらく入口に突っ立ったまま、彼を見ていた。

視線に気がついたのと、開け放たれた扉から入ってくる冷気が静紅の存在を知らせたので、彼は彼女の方を見て無邪気な笑顔を浮かべた。

「お疲れー」

「お疲れさまですっっ!」

扉を閉め、結んでいた髪を解く。飲食店というものは清潔感とやらにうるさい。肩より下くらいの長さの髪は、ゴムの跡もつかずにさりりと流れた。

「今日大変だっただろ? 団体客来るみたいだし」

「えっ、でも静紅がいたときはまだ来てませんでしたよ? 多分椿さんと真理たんが忙しくなると思っています」

「そっか。ラッキーだったなあ」

「日頃の行いですよ〜」

軽口を叩きながら、笑いあう。こんな時間が、とても好きだ。

椿はいい人なのだが、独占欲が強いらしく誰かが和貴と話している所を見ただけで嫉妬にかられる。その時の椿程怖いものはない。だから、椿と和貴が話しているとき、静紅はいつも疎外感を感じるのだ。

更衣室に入ってカーテンを閉めようとしたとき、平山さんと声をかけられる。静紅は驚いて、はいっ！？と半分叫びながら返事をした。

「何か元気ないな〜。どうかした？」

「なっ……んでもないっす！」

静紅は、足下が崩される思いがした。

どうして、と思う。

どうして、ばれてしまうんだろう。どうして、そっとしておいてくれないんだろう。彼女がいるくせに。

いっそ、今告白してしまおうか。でも、そうしたらきつと、今の関係は壊れてしまうし、椿さんに目をつけられてしまいかもしれない。想いを伝えたいのに、伝えることさえできない。ジレンマの嵐だ。

静紅は強張った表情を崩そうと、笑顔を浮かべた。和貴は心配そうに、問う。

「無理するなよー？」

「はいっ大丈夫ですっ！っていうかソレは平中さんに言ってくださいよ〜。

「平山さんをあんまり働かせるな
って」

「ははは、それもそっか」

平中とは店長の事だ。平中はなぜか店長と呼ばれるのを嫌う。名字で呼べだなんて、変な店長だな、などと考えながら静紅はカーテンを閉めた。視界から和貴が消える。しかし声はカーテンを越えて静紅へ飛んできた。

「平山さん、ここまで電車で来てるんだよな？」

「？はい」

「大変だよな、帰り大丈夫？」

自転車だと20分くらいなのだけれど、学校の帰りとなるとそのまま来たほうが早いので帰りは電車なのだ。休みの日も、帰りが遅くなる日は電車をつかう。視力が弱いくせにコンタクトも眼鏡もしない、裸眼一本な静紅にとって、夜道は恐ろしいことだらけだ。

「？大丈夫、ですよ？」

「気をつけてねー？転んだりしそうだから。また、膝に痣増えたし」

「……こっ、これはっ」

雨の日に転んだだけです。と続けようとして、やめる。また馬鹿にされそうだ。

静紅は雨が降った日に滑らなかつたことがない。特に下水道なのか何なのか金網のようなものの上が滑りやすい。静紅はあれを敵だと思っっている。

「……これは、えー……と……内出血ですっ」

「それを痣って言っただよ」

カーテンの向こうで大爆笑が起こった。

着替え終わった静紅はカーテンを開け、怒ったようにお疲れ様でしたと告げると鞆を持って和貴の前を通る。

「あ、制服だ〜」

「……だって学校帰り………市村さん、今

「本当に高校なんだ」

って思いませんでした……？」

「い、いや思っただよ〜！」

静紅は18にして自他ともに認める童顔だ。それに背が低いときた。町中を歩けば、迷子の小学生に間違えられ、病院に行けば、中学生と間違えられ、勤務中は、客に中学生？と聞かれる。……中学生はバイト、できません。

その事を真理に話すと彼女は大笑して

「ナイス客！」

と言っていた。

「ナイスじゃないよっ！」

「え！？あー……戻っただよ〜、平山さん。とりあえず」

心の中で突っ込んでいたはずなのに口に出していたことに気がついて、静紅はすみませんと謝るともう一度、お疲れ様ですと言いついでに手を掛ける。

「暗いし、雨降ってるから気をつけて」

「頑張っただよ〜……」

「ええ！？大丈夫！？」

聞かれて静紅は意味深な笑顔だけ残して休憩室を出た。

雨はいい。

冷たいけれど、何もかもを洗い流してくれるから。

このモヤモヤした気持ちも、きつと。

3*メール

夜更けとともに増えていくよ
君への想いが
静かに静かに、心に積もる

メール

「はぁーっ、辛いなぁーっっ」

静紅は開いた携帯を手に、ぐるぐるとベッドの上を転がる。
窓の外は一面闇で、深夜徘徊中の車の音は雨の音に存在を消されて
いる。

静紅は、メールのボタンを押した。

真理たん

宛先に表示されている名前を確認して、本文を打つ。

『お疲れーっっ！真理たん！（*^・*）b』

脈絡も内容もあつたもんじゃないメール。送信完了、という文字を
確認すると静紅は天井を見つめた。

どうこうしようっていうワケじゃない。ただ、誰かに話を聞いてもらいたいだけ。

メール着信を知らせる光が、ぴかりぴかり、輝いた。

『あの後予約の団体客が来て最悪でしたよ…
で、何?? 今度はどんな悩み??』

真理には全てお見通しらしい。もともと相談するつもりだったんだし、と静紅はメールを打つ。

『実は静紅、好きな人ができちゃいましたあつ』

『はあ!? 芸能人にしか恋できなかったような子が!!? お姉さんは嬉しいよ…どんな人??』

『真理たんも知ってる人。市村さん』

返事がしばらく来なかった。少し間を置いて、携帯が光る。

『椿さん怖いよー…??』

『別にどうかしようってワケじゃないもん。市村さんにも椿さんにも幸せになって欲しいし…でも胸が苦しくてー』

『んー…市村さん最初は違う人の事が好きだったのよ。辞めてった人なんだけど。で、告白したけど振られて、その時椿さんが市村さんに告白したの』

『じゃあ市村さんは誰でもよかつたって事かな!??』

『さあ…でも椿さん、市村さんと行き詰まったら必ず私にメール』

するから、その時が狙い目だね』

静紅は、少し戸惑った。

何だかずるいような気もするし、だけどとったもん勝ちな気もするし……

『狙い目って??』

『最初は優しく接して、回数が重なってきたら“市村さん、しんどそうですね”みたいなこと言うのよ』

『策士だね！真理たん凄いー』

『仕方ないから静紅ちゃんのために一肌脱ぐわよ！』

どうしようもないと思っていたけれど、どうにかなる気がしてきた。どうにもならなくて当たり前前、だったら動いてみるのもアリかななんて考えが浮かぶ。

もしかしたら、仲良くなれるかもしれない。

静紅はにやけながら、真理におやすみのメールを打って携帯を閉じた。

なのにもまた、返事が返ってくる。

『とりあえず静紅ちゃん改革！！可愛いけど、そうじゃなくて大人っぽくなるーねっ！！じゃあおやすみい』

「大人っぽく……かあ」

生粋の童顔が、高校生になれるかどうか。

一度友達に化粧された事があるが、ケバい上に、小学生がマセているようにしか見えなかった。

「とりあえずっ、市村さんの視界に入るように頑張ろうっ！」

夜更かしは美容の大敵、という言葉さえ忘れて静紅はスキンケアを始めたのだった。

4*喧嘩

他愛ない話に耳を傾ける時間
ずつとずつと幸せでありますように

喧嘩

今日は、彼の笑い声が聞こえなかった。代わりに緊張したような、張り詰めた声が飛んでいる。

どうしたんだろうと思ったけれど、椿がいるし、何より忙しいので話す暇がない。

……と思っていたら、和貴はお疲れ様ですと言いながら休憩室へ向かって行ってしまった。

完璧に機会を逃して、静紅は溜め息を付いた。

(……思い過ぎだといいいんだけど、さ)

静紅は妙な所で勤が働く。

人の機嫌の悪い時だったり、元気のないときだったり、表情の変化だったり、人の気分を伺う能力に長けている。

ふと見た椿の表情が暗い事にも気がついて、静紅は首をかしげた。

「椿さん…元気ないですね。どうしたんですか？」

「…わかる？喧嘩したとき、和貴にね、別れようって言われちゃって。私は別れたくないんだけど……」

どくん、と心臓が跳ねた。
静紅にとつたら、これはチャンスだ。
けれど。

「……大丈夫、ですよ。静紅、市村さんに言ってみます。別れな
いであげて、って」

馬鹿なことを言っているのだろう。

このチャンスを逃せば、もう次は来ないのだろう。
それでも、椿の悲しそうな表情を見ると、何も言えなくなる。

「ありがとう、静紅ちゃん」

「え、えへへっ……じゃっ、お疲れ様ですっ！」

椿の笑顔を後に、ててと走って静紅は休憩室に向かった。
休憩室のドアの前で、入るのを少しためらっていると、声が聞こえ
た。

すすり泣く、声。

(市村さんが、泣いてるの?)

だとしたら、自分は和貴に声をかけてはいけない気がする。今声を
かけたら、優しい言葉をかけたら、弱味につけこむ事になるだろう
から。

ドアに手を掛けて、息を吸い込む。

誰かが扉を開いて入ってくるのを悟った和貴は更衣室へ入りカーテ
ンを閉めた。

「……あのっ……お疲れ様、ですっ」

「お疲れ様ー。今日も忙しそうだったな」

「あ、あのっ……椿さん、元気なかったです。えっと、別れたくないって、言っていました……っ」

返事が返ってこない。

静紅は困って、しかし椿に頼まれた事を思い出し、小さく深呼吸して自分を励ます。

「椿さんの事、嫌いになったんじゃないなら……やり直してあげてください……っ」

カーテンの開く音がした。

地面を睨んでいた静紅は顔をあげ、音のほうを見る。
ひどく悲しそうな、和貴。

「……何で、平山さんが泣いてるの」

「……っ、……だって、市村さんが悲しそうで、椿さんも悲しそうで、……変じゃないですか……っ！」

付き合っているのにお互いが悲しそうだなんて、変だと思う。

ずるい、と静紅は思った。

自分は、好きでいることさえも許されないのに。付き合っているのに悲しそうな顔をする椿が。和貴に悲しそうな顔をさせる椿がずるいと思った。

「だって、付き合っつて……楽しいことのはず、……じゃないですか……っ」

再び地面を向く。

和貴の手が、ふわり、静紅の頭を撫でた。

「泣かないでくれよ……悪いことしてるみたいじゃん」

「……市村さんは、椿さんのこと、嫌いになっちゃったんですか……?」

「嫌いじゃないけど、もう疲れた……独占欲強すぎ」

その冷たい言葉は。

いつもの和貴からは発される事がない、酷く冷えたものだった。

「……市村さんがそんな事言っちゃ駄目です！椿さんは、市村さんの事好きだから……、……ごめんなさい。静紅が口を挟む事じゃないですよ……」

「……もう、別れるから」

静紅は何も言う事ができなかった。

優しい言葉をかけて気を引こうと、少しでも思っていないわけではないから、今何か言うのは卑怯な気がする。

これは、自分が望んでいた展開のはずなのに。和貴はとても悲しそうだ。

(……悲しそうな市村さんなんか、望んでないよ……っ)

「……別れる」

和貴は、再び小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065a/>

失恋を始めよう。

2010年10月21日22時09分発行